



聖戦記 エルナサーガ

ガンガンファンタジーコミックス

聖戦記 エルナサーガ

全13巻

(新装版全8巻)

著者 堤抄子

発行所 株式会社エニックス

感想と理由

強さとは、なんだろう。

腕力だろうか、意志だろうか。

傷を負う時もある、迷う時もある。

私が思う強さとは、人と手を取り合うこと、だ。

誰にも弱い時はある。

倒れて立ち上がる勇気もてない時がある。

「自分は一人ではない。差し出した手を、強く握ってくれる人がいる」

そう信じる、強さ。

「聖戦記 エルナサーガ」を読んで、得たものだ。

ファンタジー漫画である。

王族がいて、竜がいて、魔法がある。

世界中の人々は、強弱の差こそあれ、全員が魔法を持っている。

魔法の力が強ければ、より高位で高度な呪文が使えるためか、

王族は一般庶民よりも魔法が強い人間が多い。

アーサトリアル王国。

亡き先王の息子・エイリーク王子は、その魔法の強さから「光の王」とたたえられる。

先王の弟の娘・エルナ姫は、世界中でただ一人、一切の魔法を持たないため「闇の姫御子」と噂される。

主人公・エルナは・・・

両親はすでに亡く、その特異性から、城内で孤立していた。

誰もが持つ魔法はなく、剣を振るう力もなく、

国や国民を思いながらも、世界を脅かす方法に立ち向かえない。

アーサトリアルの命運を託した計画のはじまりが、世界の3つの国を巻き込む運命のはじまりだった。

アーサトリアルのエルナ、

アンサズのシャルヴィ、

グードランドのラヴァルタ。

それぞれに国を、世界を思いながら、物語は進行する。

力なきエルナ。

だが彼女は、人を信じ、人を思い、彼女のために人は立ち上がり、

いつしか世界を救う大きな波となった。
いつもいつでも、共に手を取り、同じ方向を見ている人がいる。
振り向けばいつもそこにいる、だからこそ前を向いて走り出せる。
それは、たったひとつの手を取ったことから始まった。

いつかきみに、この思いのたけを、伝えたい。

「聖戦記 エルナサーガ」は全13巻から構成されるが、
物語の核となるさまざまな要素が、第1巻にあますことなく収録されている。
世界中で、なぜエルナだけが、魔法を持たないのか？
アーサトユアルの王族は、なぜ若き王子と姫しかいないのか？
城付きの大魔道士ヴァーリの野望と目的は？
また、彼の「闇の姫御子など時間さえあれば・・・いくらでもつくれるわ」P185、186
という思いはなにを指すのか？
これらの伏線は、すべて理由があり、物語が進行する中、解消される。
伏線を張って説明ないまま、ということはない。
完成度が高く、また、素晴らしい作品だと思う。